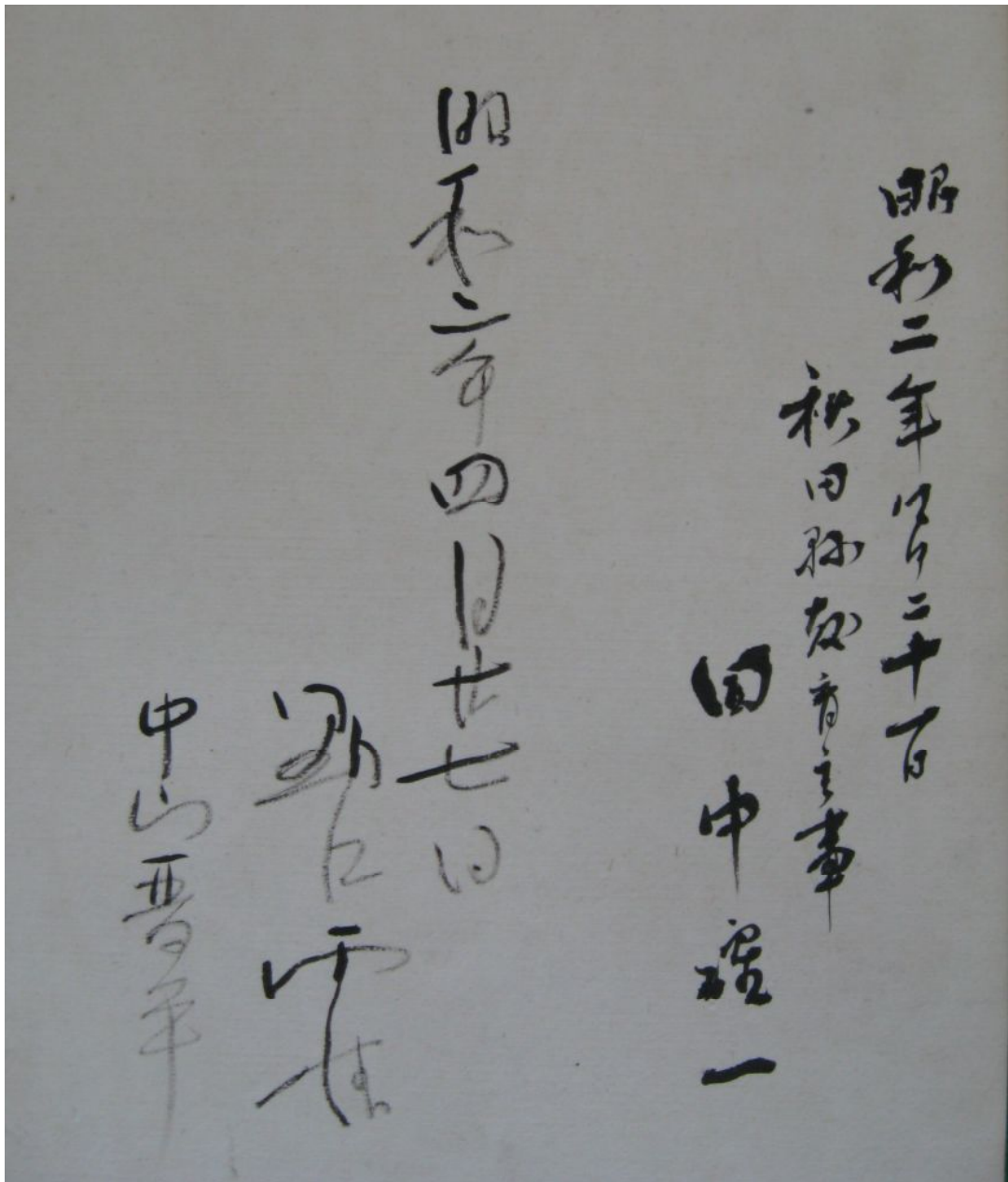


野口雨情・中山晋平 南座で講演と演奏



昭和二年四月二十一日
秋田縣教育主事
田中 確一

昭和二年四月廿七日

野口 雨情
中山 晋平

<記帳者の紹介>

野口 雨情 1882～1945

童謡・民謡詩人

茨城県の資産家の家に生まれ、中学～東京専門学校（中退）時代を伯父（代議士で東京在住）のもとで過ごしながらか、詩作・句作に励み、鈴木善太郎・小川未明・三木露風らと知り合う。

明治40（1907）年～同42（1909）年まで、北海道の新聞社勤務を転々とする間、石川啄木を知る。一時、詩壇から離れ、生まれ故郷で山林管理・農業に従事したが、大正9（1920）年上京、以後、童謡・民謡の創作に活躍した。

代表作に、「七つの子」・「青い眼の人形」・「赤い靴」などがある。『定本 野口雨情 第5巻』昭和61（1986）年/未来社 に地方民謡として、「島原」・「多比良小唄」・「佐世保小唄」・「佐世保メロデー」が掲載されている。

中山 晋平 1887～1952

作曲家、日本音楽著作権協会会長

島村抱月の書生をしながら東京音楽学校を卒業、抱月主宰の芸術座公演「復活」の劇中歌「カチューシャの唄」（唄；松井須磨子）で、名声を確立する。

その後、北原白秋・野口雨情・西条八十らの作詞家と組んで、童謡・流行歌を発表した。

代表作に「てるてる坊主」・「天童下れば」・「東京音頭」などがある。野口雨情とのコンビで創作されたものとして「船頭小唄」・「雨ふりお月さん」・「シャボン玉」・「証城寺の狸囃子」などがある。

田中 確一

秋田県教育主事

本館所蔵『職員録 昭和二年七月一日現在』（内閣印刷局）、『同 昭和三年七月一日現在』に記載がある。その前後の『職員録』秋田県の項からの記載は、見出せない。



民謡の講演と演奏

二十六日、南座に於ける野口雨情氏、中山晋平氏、佐藤千夜子嬢の童謡と民謡の講演と演奏は各方面に大なる期待を以て迎へられて居るが、三氏は二十五日来崎福島屋に投宿する筈、又袋町青年会館で演奏者に対して花束を贈ることになったと

(新聞では、野口と中山の写真の説明が誤っています。

正しくは、右が野口、左が中山です。)

註) 声楽家；佐藤千夜子の『芳名録』への記帳はありません。

野口・中山・佐藤の3人がともに仕事をしたことを示すものとして、以下のような資料があります。

- ・随筆「入京の困難」(『定本 野口雨情 第8巻』昭和61(1986)年/未来社 所収)
「震災当日の前日、……佐渡……に招かれて、作曲家中山晋平氏、声楽家佐藤千夜子さんと共に上野駅をたちました。……」
- ・島田豊 著「思い出の雨情」
(『みんなで書いた野口雨情伝』昭和48(1973)年/金の星社 所収)
P277 に「思い出の人々」と題した写真があり、3人と藤枝静枝が写っています。

秋田縣		秋田市土手長町	
(交換)六三三、六三六、七三八、八四六(直通)知事 官房書記、四等書記、三座事務課、四二二會計課、 (執務時間外直通)一内務部(直)、四警察部(直)			
知事 第一級	正四勳三力石雄一郎	●内務部	書記官 三等二級 部長 從五勳六 落合慶四郎
地方事務官	地方課長 從六 辻利吉	地方事務官	庶務課長 從六 植川義隆
五等四級		農務課長 兼 視書課長 從七 長文書課長 正七	
五等五級			
六等五級			
		●學務部	書記官 四等五級 部長 視學官 正六 二見直三
		地方事務官	學務課長 岡松生
		學校衛生技師	正七 吉野中
		社會教育主事	正七 田中確一
		社會事業主事	從七 安藤寛
			(七等待遇)八

●学務部
 社会教育主事
 (六等待遇)九 正七 田中確一

『職員録 昭和二年七月一日現在』
 と、田中確一氏の記載は全く同じです
 が、その前後の『職員録』秋田県の項
 には、田中氏の記載が
 見られません。